めぐりあい

富田仁

『毎日新聞』夕刊に「めぐりあい」と題する欄がある。ある人物が人生でめぐりあったひとりの人物に宛てゝそのひととの出逢いを綴る文章が掲載されている。この「めぐりあい」を読むたびに、人生がいかに人間と人間の出逢いで大きく変わるものかを思い知らされる。対人関係の意義についてさまざまに考えさせられるのである。

私の場合をふりかえるとき、やはりそうした〝めぐりあい〟が今日の自分をつくりあげていたことを知らなくてはならない。師、友、妻など、私にもいくつかのめぐりあいがあった筈である。

大学、大学院を通じての指導教授である早稲田大学名誉教授の佐藤輝夫先生は、私にとっては、比較文学研究への道を拓いてくれた文字通りの恩師である。大学の卒業論文にフランスの比較文学をとりあげたときから、佐藤先生は私の学問・研究上の最大の師となった。大学院の修士論文の指導に加えて、博士課程に入った年、新しく設けられた比較文学研究室の助手に採用してくれたのも先生である。比較文学研究の専門家へと育ててくれようとする先生の抜擢人事であり、私はその恩顧に報いるべく私なりに頑張った。論文を毎年執筆する習慣をつけていただいたのもこの助手時代である。先生ご自身はとくに比較文学のご専門ではないが、中世フランス文学研究の文献的方法は私にも少なからぬ感化をあたえてくれたようである。

佐藤輝夫先生は学問、研究には人一倍きびしく、弟子たちにはたえず学位論文をまとめるようにすすめるので、ともすれば煙たがられるが、私は助手時代の習慣で、たとえ不十分であろうとも、毎年論文あるいは単行本を書いているので、先生をことさらにこわがる必要もなく、先生の前に顔を出している。もっとも、学位論文は遠い将来のこととしている。そんな私ではあるが、先生の深い学識にはつねに羨望と畏怖の念を覚えつつ、先生を仰ぎみている。弟子が師をのりこえることこそ学恩に報いることだと、かつて先生はフランス中世文学研究の権威ガストン・パリスを例に話されたが、私にはたとえそれが一つの願望となろうとも、ゆめ叶えられることのないものであることを知っている。それでも、いつの日にか、先生に学問・研究において認められる弟子になりたいものだとひそかに思わないわけにはいかないのである。

教場を通じての〝めぐりあい〟の師が佐藤輝夫先生であるとすれば、私にはフランス学という研究分野でもうひとり、師とも先生ともお呼びしなくてはならぬ方がいる。元・共立女子大学教授であり、日本仏学史学会々長でもある高橋邦太郎先生との〝めぐりあい〟も私の学問・研究の歩みの上では看過しがたいのである。十年前に、日本フランス語フランス文学会の有志で、日仏文化交流史の研究を目的とする日本仏学史研究会を発足させたが、高橋先生は斯学の先達として有名であり、会長になっていただいた。私はそれ以前に、早稲田大学比較文学研究室の講演会に講師として先生をお迎えしたときにお宅まで送迎したことで、先生にお会いしていたが、日本仏学史研究会の発足で、先生の学問・研究にじかに触れる機会に恵まれることになった。

先生は永井荷風、長谷川伸などにも可愛がられ、芥川龍之介の葬儀にも参列され、森鷗外の小説に「高橋少年」として登場するなど文壇的交際もあり、築地小劇場の文芸部にも入られ、『椿姫』の翻訳を初めとして多くの翻訳も手がけられ、NHKにも籍を置くなど、きわめて幅広い活動をなされながら、とくに日仏文化交流史の研究で大きな足跡を残されているのである。

高橋先生はいわゆる敵のいない、温和な性格の方で、私のような者にも眼かけてくださり、文献・資料も気前よく貸してくださる。日本仏学史研究会は、いまでは日本仏学史学会として毎月研究発表会を重ね、機関誌『仏蘭西学研究』を刊行する学会にまで育ってきているが、これもひとえに先生のご人徳の賜物と感謝している。秀れた領袖のもとには多くの人材が集まってくるのだ。昨秋の学会で、「高橋邦太郎賞」を制定し、先生とその学恩に報いることにしたが、三年前、先生はフランス政府からも叙勲されているので、今度は先生のお名前を冠した賞で、日仏文化交流史の研究に携わる学徒を奨励しようというのである。

高橋先生が叙勲したのは学術功労章（パルム・ダカデミック）であったが、授賞式数日前に病いに倒れられて、先生はご出席できなかった。パーティの席上、フランス大使は先生の長年の研究を称え、あわせて日本仏学史学会の活動に触れられたが、フランス人にとって学会の活動はフランス人の事蹟を掘り起して紹介するということだけでもうれしいことにちがいない。日仏の出会いから西園寺公望がパリで翻訳した『蜻蛉集』にいたるまで、先生は多数の研究業績を発表し、毎年のようにフランスに赴き、資料の蒐集を重ねてきたのであるが、そうしたことがフランス政府にも認められて叙勲となったのである。

私は最初のフランス文学の翻訳者・川島忠之助の歩いた道をたどる過程で比較文学からフランス文学の研究へ進むことになったが、そこで、もうひとりの〝師〟、高橋邦太郎先生にめぐり逢ったのである。

佐藤・高橋両先生はすでに八十路の坂をのぼられているが、学問・研究への情熱は衰えることなく燃えさかっていて、お会いするたびに多くを教えられるのである。

私は良き師とめぐりあえたことに大きな幸福を覚える。私も教える立場にいるわけだが、はたして学生たちにはどのような存在として映っているのだろう。そう考えるとき、ふと、忸怩（じくじ）たる気持になる。良き師とは、無言でいても大きな感化をあたえる存在であるようだ。